歴史地理学　51－5（247）1～22　2009. 12

近代日本における野菜種子流通の展開とその特質

―盛岡近郊の種苗業者の取引記録からの考察―

清　水　克　志

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．盛岡市仙北町の種苗業者
　(1) 野菜種子流通拠点としての盛岡市仙北町
　(2) 高橋種苗店の取引記録
Ⅲ．旧盛岡藩領内における地方種苗業者の諸機能
　(1) 野菜育採種業地域の紐帯としての機能
　(2) 野菜種子供給の拠点としての機能
　(3) 地域農業の牽引役としての機能
Ⅳ．野菜種子の全国的流通網における盛岡の位置づけ
　(1) 伝統的中心地としての歴史的基盤
　(2) 本州と北海道を繋ぐ結節点
Ⅴ．おわりに

Ⅰ．はじめに

日本における野菜種子の生産・流通を取り巻く状況は，第二次世界大戦後の高度経済成長期を境として，大きく変貌したといわれている[1)]。具体的には，主要な品目がほぼ完全に「固定種」から「一代交配種（F1）」へと移行し，品種の単純化が進んだこと，それに伴い，育種や採種部門が，京都のタキイや横浜のサカタに代表される大手業者によって寡占的な状況になる一方，多くの地方業者が廃業もしくは小売業者化したこと，あるいは国内で消費される野菜種子の大部分を海外で採種するようになったこと，などが指摘されている。とくに，「一代交配種」への移行は，高度経済成長期以降，都市へ大量かつ安定的に野菜を供給するための主産地形成において，耐病性に優れ栽培が容易な品種，形が均一で運搬しやすい品種が求められたことと不可分の関係にある。

地理学の分野では，野菜主産地の形成については，早くから関心が寄せられ，多くの研究成果が蓄積されてきた[2)]。しかしながら，野菜生産の前提条件となる野菜種子の生産・流通の実態については，高度経済成長期以降であれ，あるいはそれ以前の時代であれ，従来ほとんど注意が払われてこなかったといっても過言ではない。野菜種子の生産・流通の担い手の多くが，「タネヤ」と呼ばれる民間の種苗業者であるため，その経営に関する情報は秘匿性が高く，門外不出とされてきたために，資料そのものが得にくかったことも否定できない。

そのような中，近年ごく少数ではあるものの，近代における種苗業者の取引を記録した史料の存在が確認され，野菜種子流通の実態解明への機運が高まりつつある。東京都豊島区西巣鴨の榎本留吉商店の史料群（榎本留吉家文書）は，その代表例とみられる。同史料群については，豊島区郷土資料館において整理が着実に進められており[3)]，その一部は企画展などを通じて，すでに公表されている[4)]。

キーワード：種子流通，種苗業者，育種技術，大福帳，盛岡市

図１は，大正７(1918) 年に刊行された『全国種苗業者人名録』[5] をもとに，野菜種子を取り扱う種苗業者数を郡市別に示したものである。これによれば，当時，野菜種子を主に扱う業者だけでも3,600軒以上確認できる。これは，2009年現在の日本種苗協会の会員数1,371名[6] と比較して，相当多いといえる。東京の滝野川周辺や濃尾平野に，種苗業者がとくに集中する地域がみられ，両地域が当時の日本を代表する野菜採種業の集積地域であったことがわかる。しかしながら，当時における大多数の種苗業者は，疎密に程度の差こそあれ，いずれの地域においても在町を中心に１～数軒ずつ分布しており，滝野川周辺や濃尾平野のような地域は，むしろ例外的であるといえる。このことは，地域農業に根差した地方種苗業者への着目こそが，自給的な野菜栽培や野菜の商品化過程などの地域的展開を含めた，近代日本における野菜種子流通の実態を解明する上でも，重要な意義を有していることを示すものであろう。そこで本稿では，近代日本における野菜種子流通の特質を，地方種苗業者による野菜種子流通の実態解明を通して明らかにすることを目的とする。

筆者は，かつて岩手県におけるキャベツ生産地域の成立過程を解明した[7] が，その際，盛岡近郊の民間育種家が，外来野菜であるキャベツの導入と普及に果たした役割や，民間育種家を輩出した地域の特性について検討することが次なる課題として残った。そして，この課題に取り組む過程で，盛岡市仙北町の高橋種苗店に私蔵されていた，同店の明治後期から昭和初期にかけての取引記録（高橋　修家文書）を閲覧する機会を得た。本稿では，この高橋　修家文書の翻刻・分析を通して得られた結果をもとに，同店における野菜種子の取引相手と取引内容を中心に，野菜種子流通の実態を提示する。その上で，同店における野菜種子流通における周辺地域や遠隔地との地域間関係，あるいは育種や採種部門など，野菜種子流通そのもの以外の諸機能などについても考察を加える。

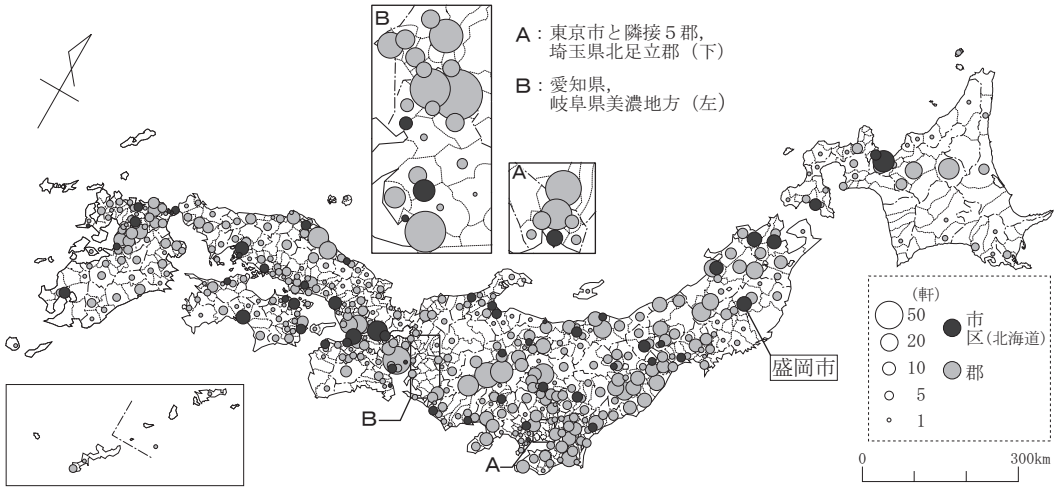

図１　大正期における種苗業者の分布（郡市別）

資料：『全国種苗業者人名録』
注：空白は０軒を示す。
図示した以外に朝鮮（61軒），台湾（２軒），中国（２軒），樺太（１軒）の記載がある。

Ⅱ．盛岡市仙北町の種苗業者

(1) 野菜種子流通拠点としての盛岡市仙北町

盛岡市は，盛岡藩南部氏20万石の城下町としての起源をもち，岩手県中南部と青森県東部，秋田県旧鹿角郡域に及ぶ同藩の藩都として高い中心性を有してきた。盛岡城下の南端部を占める仙北町は，奥州街道や北上川舟運の終点である新山河岸を擁する水陸交通の要衝であった（図２）。盛岡以南の北上川流域は，盛岡藩領随一の穀倉地帯であり，仙北町には，これらの地域と取引関係をもつ米穀商や酒造業，藁物商などが多数集積していた。

また仙北町は，盛岡城下から至近距離に位置することに加え，地味の肥沃な雫石川と北上川の氾濫原に立地していたことから，盛岡城下近郊の野菜生産地域の一角を占めていた[8]。さらに仙北町は，明治後期において５軒の種苗業者が存在していることからもわかるように，野菜種子の生産および販売が盛ん

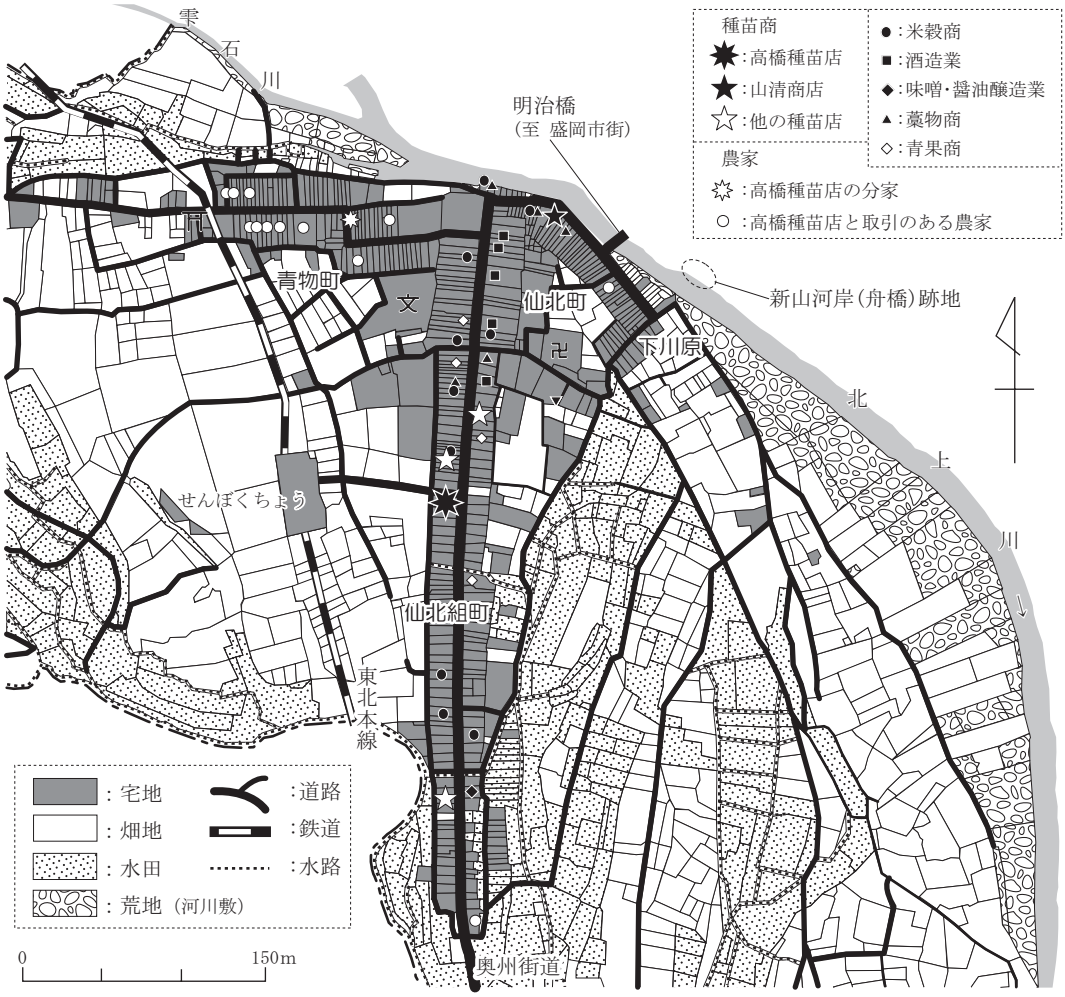

図２　明治後期における盛岡市仙北町の景観と主要業種の分布

資料：『もりおか物語（四）－仙北町かいわい－』および現地調査，
基図として盛岡市役所所蔵「仙北町旧公図」を使用

な地域でもあった。仙北町には，交雑の防止に好適な水田や荒地と錯綜する畑地が多いこと，種子の乾燥場として利用可能な河川敷が存在することなど，野菜種子の生産に有利な条件が揃っていた[9]。

仙北町には，近世に創業した山清商店と高橋種苗店の2軒の種苗業者が，現在も経営を続けている。山清商店は，農業と材木業を営んでいた7代目山田清之助が，文化年間（1804～18）に種苗商を創業した[10]。7代目清之助は，南部長ゴボウ，南部長ナス，南部キンカ[11]，十文字カブ[12]などに加え，江戸に南部馬を売りに行く馬喰が持ち帰った各地の特産種子を譲り受け，これを原種として採種し，その種子を販売した。近代に入り，明治10年代（1877～86）には，ナシの栽培や外来野菜であるタマナ（玉菜，キャベツ）やサントウサイ（山東菜）の採種を開始し，明治39（1906）年からは蚕種や養蚕具・桑苗の販売を開始した。さらに大正12（1923）年には，10代目清之助が岩手県で初めて劇毒物事業管理人の資格を取得し，農薬の販売を開始するなど，多角的な経営を展開した。山清商店は，昭和戦前期において，日本の種苗業界の中でも代表的業者の一つに位置づけられる存在であった[13]。

一方，本稿で主として取り上げる高橋種苗店は，青物町の農家であった高橋吉太郎（初代）が万延年間（1860～61）に創業した[14]。2代目徳兵衛は，明治20年代（1887～96）に，弟の安五郎に自宅を譲って分家させ，自らは奥州街道筋の仙北組町に店舗を移転した（図2参照）。高橋種苗店においても，山清商店と同様に，南部長ゴボウ，南部長ナス，ニンジン，タマナ，サントウサイなどの採種を行い，仙北町周辺の農家に販売していた。明治30年代後半には，徳兵衛の息子である吉兵衛（後の3代目）の成人を機に，養鶏業やブドウ栽培を導入する一方，北海道や秋田・青森方面へ野菜種子の販路を拡げていった。高橋種苗店は第二次世界大戦当時，山清商店とともに，岩手県内への野菜種子の配給担当業者に任命された[15]。このことを考慮すると，同店は，山清商店と並び，岩手県を代表する有力な種苗業者であったとみなすことができよう。

（2）高橋種苗店の取引記録

本稿で主たる分析対象とする史料は，高橋修家に私蔵されている高橋種苗店の野菜種子の取引に関する記録である。その内訳は，明治42（1909）年，明治44年，大正2（1913）年，大正3年，大正5年，大正6年，昭和2（1927）年，昭和4年，昭和6年に記帳が開始された野菜種子の出入荷を記録した帳簿9冊と，大正13年3月から逐次取引相手を書き足していったとみられる[16]「取引店住所芳名録」（以下，「芳名録」）1冊である。野菜種子の出入荷記録のうち，大正期以前の6冊は，和綴じ横帳で表紙に「大福帳」と大書されている。また，昭和期以降の3冊は，罫線入りの用紙を上製本した帳簿であるという点で，前述の6冊と違いがあるものの，記載された項目や内容は同じである。したがって，以下ではこれら9冊を一括して「大福帳」と呼ぶことにする。

「大福帳」には，取引相手の住所および氏名，取引の期日，取引品目の品種や価格，数量などが明示されている。取引品目の大部分は野菜種子であるが，一部に花卉種子や種子用絵袋，粉なんばん[17]などを含んでいる。

高橋種苗店の「大福帳」の記載形式には，①出荷記録と入荷記録が独立しておらず，両者が取引相手ごとに同一の帳簿に記載されていること，②入荷記録に比べて出荷記録の分量が圧倒的に多いこと，③出荷記録に，その種子の生産者名が付記されている場合が多く，同店による種子の入手経路がある程度特定できること，などの特徴がみられる。したがって「大福帳」は，同店を経由した野菜種

子の出入荷の実態を把握することが可能な史料であるといえる。以下では，「大福帳」と「芳名録」に記載された，種苗業者や近在農家を，各地域スケールごとに整理し，高橋種苗店の取引相手の全容を提示する。また，個々の種苗業者や近在農家との間で取引される，野菜種子の品目・品種とその数量（取引内容）についても，具体的に検討することとする。

Ⅲ．旧盛岡藩領内における地方種苗業者の諸機能

(1) 野菜育採種業地域の紐帯としての機能

仙北町の種苗業者が，盛岡近郊の野菜生産地域における野菜種子需要を背景として成立したことは，先述したとおりである。実際，高橋種苗店でも，大正期から昭和戦前期にかけて，青物町，仙北町，仙北組町，下川原など仙北町内の町丁に加え，北上川対岸の各町や紫波郡北部の津志田，三本柳，手代森などに取引相手をもち，その多くは農家であった（図３）。仙北町内の取引相手のうち，在所の特定できる農家については，先に図２に示したとおりであるが，かつての高橋種苗店の所在地でもあった青物町内に，多くの取引相手をもっていたことがわかる。

大正２(1913) 年当時の高橋種苗店と近在農家との取引内容には，注目すべき点が２つある。すなわち，第一に，近在農家への多様な栽培用種子以外に，西洋ニンジン，タマナ，サントウサイ，ゴボウ，長ナスなどの「親種」と呼ばれる採種用種子（原種）が含まれ

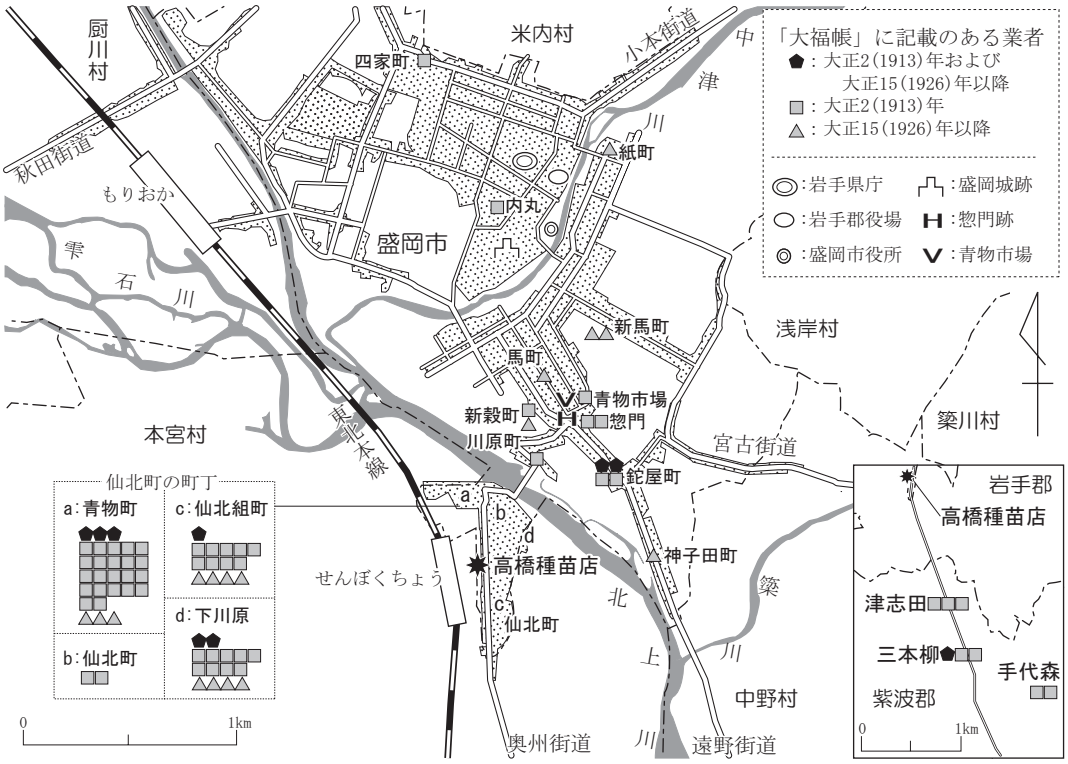

図３　盛岡近郊における高橋種苗店の取引相手（1913～35年）
資料：高橋家所蔵「大福帳」および「芳名録」

ていることであり（表１），第二には，高橋種苗店が近在農家の一部から，種子を入荷していることである（表２）。前者は，高橋種苗店が，盛岡特産のゴボウや長ナスのみならず，明治以降に日本へ導入された西洋ニンジン，タマナ，サントウサイなどの原々種を保持して，原種を採種していたことを示している。また後者は，高橋種苗店の原種をもとにした採種を委託され，種子を量産する近在農家層が存在したことを示すものである。これらのことにより，仙北町周辺では，種苗業者以外にも採種技術を保持する農家が多数存在し，これらの近在農家もまた，種苗業者とともに，野菜育採種業の一部を担っていたことは明白である。

外来野菜の中でも，とりわけタマナについては，神子田町の篤農家である工藤惣太郎が明治37（1904）年に「南部甘藍（カンラン）」を育成したことが明らかになっている[18]。さらに以下に示す『岩手県の特産南部甘藍に就て』[19]の一節は，「南部甘藍」の育成過程において，仙北町周辺の種苗業者や篤農家らが密接に関わっていたことを示している。

> 本県に於ける甘藍採種の嚆矢とも云うべきは，盛岡市青物町鈴木米吉氏なるが如し。由来同氏は，蘿蔔（ダイコン）・牛蒡・茄子・胡瓜・甜瓜（マクワウリ）等の採種をなし，旧南部藩領地内は勿論，北海道函館方面迄之が行商をなせり。而して明治二七－八年頃において，既に甘藍の採種をなすに至れり。（略）山田（清之助）氏の採種は其後にして，工藤惣太郎氏とよく種子の交換をせられたり（カッコ内筆者補入，以下同様）

先に示した，山田清之助が明治10年代からタマナの採種に着手したとする記述とは，一部矛盾する点があるものの，仙北町周辺には，工藤以外にも明治20年代以前からタマナの採

表１　高橋種苗店による原種の出荷（1913年）

（単位：升，小数点第2位以下四捨五入）

住所		氏名（または屋号）	ゴボウ	西洋ニンジン	タマナ	サントウサイ	長ナス	その他
盛岡近在	青物町	荒川兼吉					0.1	
		梅沢孫七				0.3		
		小田嶋善太郎					0.5	
		蔀川円次郎		0.2				
		高橋安太郎	6.7	4.0		0.3	0.2	*1
		松島才助				0.2	0.1	
		松嶋屋		0.3	0.0			
		甚七				0.2		
		大吉				0.0		
	仙北組町	荒川喜助						*2
		金沢金十郎	0.4			0.1	0.4	
		高橋伊之助					0.1	
		山田善吉	1.0					
		川井				0.2		
		谷地	0.6		0.0		0.1	
	下川原	渋川菊松					0.1	
		渋川三郎				0.2		
		山川兼松	0.1		0.1	0.2		
		菊茂						*3
		善二郎					0.1	
		金次郎		0.3	0.1			
	向川原	石沢		2.0				
	惣門	佐々木竹松			0.2			
	鉈屋町	大久保仁助						
	四家町	太夫	0.1					
	津志田	吉田市太郎	0.2		0.2			
		吉田文治郎				0.1	0.1	
		彦兵衛	0.4	0.3	0.0		0.1	*4
	三本柳	本家	0.5					
	不詳	五日市富市		1.1				
		大沢清五郎			0.1		0.2	
		佐々木栄助				0.3		
		佐々木寅吉			0.1			
		田中松太郎				0.2		*5
		勘助カマド		0.3				
旧盛岡藩領	日詰町	内川戌松			0.7		0.1	
	二子村	及川長作			4.0			
	宮古町	盛田末吉			0.1			
	三戸町	山川兼松			0.1			
計			9.9	8.4	5.7	2.1	1.9	

資料：高橋家所蔵「大福帳」
*1：練馬ダイコン(0.3)・宮重ダイコン(0.3)
*2：時無ダイコン(0.1)
*3：時無ダイコン(0.1)
*4：太ネギ(0.1)
*5：白丸カブ(0.1)

表 2　近在農家から高橋種苗店への野菜種子の入荷（1913年）

（単位：升，小数点第 2 位以下四捨五入）

住所	氏名（または屋号）	時無ダイコン	宮重ダイコン	ゴボウ	サントウサイ	タイサイ	太ネギ	細ネギ	南部キンカ	キュウリ	その他
青物町	荒川兼吉		5.5		2.0		3.5				
	梅沢孫七			3.0	13.0		1.5				赤カブ(5.0)，長ナス(1.5)
	高橋安太郎	2.5			0.5		1.4		0.0	3.0	西洋スイカ(4.0)，西洋カボチャ(4.0)
	松島栄三	3.0					1.0				夏ダイコン(4.5)
	松嶋才助			0.7	4.0			1.0			バショウナ(2.9)，シソ(0.5)
	甚七					2.0					
仙北町	松嶋専太郎	15.0	3.0		4.0	3.2					
仙北組町	山田善吉		1.5								聖護院ダイコン(0.3)
	谷地								3.0		
下川原	渋川菊松										タマナ(0.7)
津志田	吉田文治郎								0.8		
	彦兵衛								4.1		
上記以外の近在農家		0.1		3.2	3.0		7.6	2.0	7.4	0.9	砂糖カブ(3.1)
二子村	及川長作			15.1							
計		20.6	10.0	22.0	26.5	5.2	15.0	3.0	15.2	3.9	

資料：高橋家所蔵「大福帳」

種を行うものが複数存在したことは間違いないであろう。このことに加え，鉈屋町の青物問屋の佐藤谷次郎は，工藤が南部甘藍の育成をする過程で，タマナと同じアブラナ科のダイコンやカブ，クキタチナ，カラシナなどとの交雑を避けるため，タマナの採種地を隔離することを進言したといわれている[20]。こうしてみると，「南部甘藍」の育成は，工藤が単独で行ったというよりも，仙北町の種苗業者や，鈴木米吉に代表される採種技術を保持する篤農家らとの間で，育種の知識や技術に関する情報共有のもとに達成されたとみなすことができる。

盛岡市仙北町とその周辺は，単に複数の種苗業者が集積するだけにとどまらず，採種技術を保持する近在農家層もまた多数存在しており，両者は，採種の委託や育採種に関する知識や技術の情報共有を通して，有機的に結びつき，野菜育採種業地域を形成していたといえる。種苗業者は，この有機的な結びつきにおいて，採種のもととなる原種を育成・保持することにより，野菜育採種業地域の紐帯としての機能を担っていたといえる。

(2) 野菜種子供給の拠点としての機能

図 4 は，岩手県と隣接県の一部を含む地域における高橋種苗店の取引相手を示したものである。これらのうち，大正 2（1913）年当時から取引関係にあった業者は，紫波郡日詰町の内川戌松，稗貫郡石鳥谷町の菊地民次郎，和賀郡二子村の及川長作，下閉伊郡宮古村の盛田末吉，三戸郡三戸町の山川菊松の 5 軒である。これらの所在地は 5 軒のうち 4 軒までが盛岡周辺の在町であり，残る二子村も奥州街道筋に位置し，二子サトイモなどの特産地であった[21]。昭和 2（1927）年以降には，稗貫郡花巻町の照井庄蔵，岩手郡沼宮内町の中村広治など，さらに昭和 6（1931）年以降に

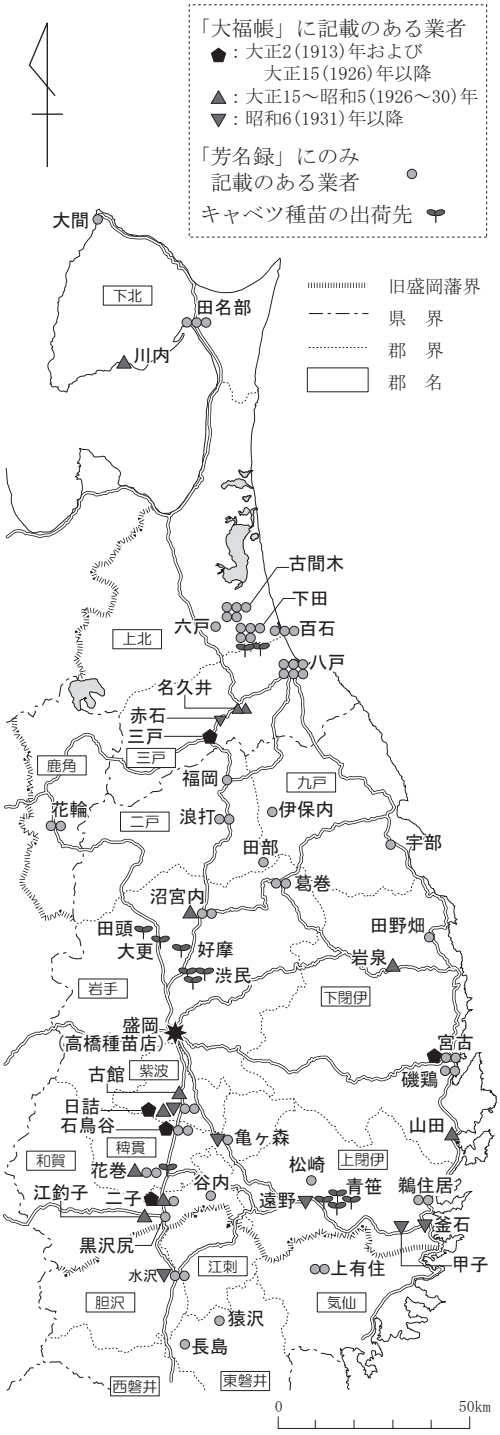

図 4　旧盛岡藩領における高橋種苗店の取引相手（1913～35年）

資料：高橋家所蔵「大福帳」および「芳名録」

は，上閉伊郡遠野町の小原　勇，同郡釜石町の高橋藤助など，上記以外の周辺在町の業者へも取引を拡大させたことが確認できる。これに「芳名録」に記載された二戸郡福岡町，下北郡田名部町，鹿角郡花輪町などの業者を加えると，高橋種苗店では，かつての盛岡藩領のほぼ全域にわたり，在町に立地する業者との間で取引ネットワークを形成していたことがわかる。これに対して，かつて仙台藩領であった岩手県南部への取引範囲の拡大は緩慢であり，古くからの地域間関係が踏襲されていたとみられる。

これに加え，昭和初期の「大福帳」には，盛岡近在や周辺在町の農家に対し，彼らの行商先へ野菜種子を郵送した記録が21名分確認できる。図５は，高橋種苗店が，野菜種子を郵送した地点を種子の発注者別に示したものである。このうちいくつかの例を示せば，新穀町の山田善次郎（Q）は下北郡大湊・大畑・大間，新馬町の大ヶ生善次郎（O）は上北郡野辺地および東津軽郡小湊・浅虫，馬町の菊地吉右衛門（N）は二戸郡福岡・北福岡・金田一および九戸郡軽米・小軽米・伊保内，青物町の宮野勘次郎（B）は下閉伊郡宮古・山田・田老・小本・岩泉，下川原の植村一郎（J）は上閉伊郡遠野・大槌・橋野・吉里吉里，青物町の佐藤喜兵衛（C）は鹿角郡花輪，仙北組町の吉田徳松（G）は和賀郡泉沢・湯本へ野菜種子の郵送を依頼している。これらの地域は，下北半島や奥羽山脈および北上高地の山間部，三陸海岸沿岸などであり，その多くは，高橋種苗店との取引業者が存在しないことからして，種苗業者が不在の地域である可能性が高い。

高橋種苗店の近在農家が野菜種子の行商をしていたことについては，同店３代目の高橋吉兵衛が，以下[22]のように述べている。

> 野菜の種物をつくると，今度は行商人たちが，それを持って方々サ行商に出か

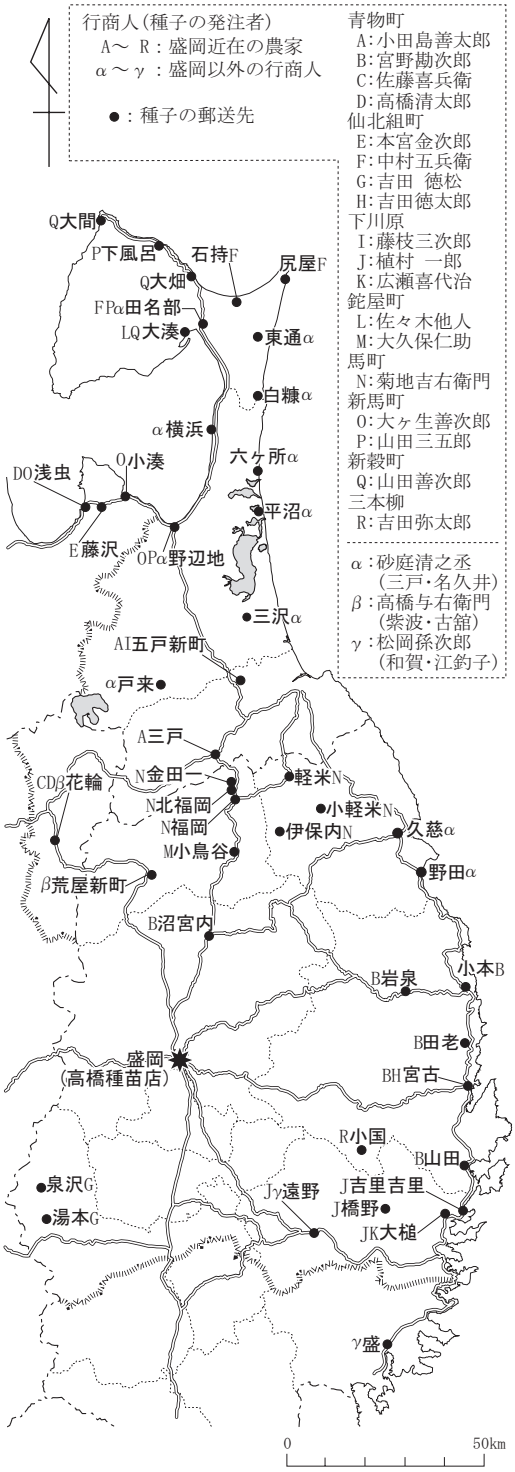

図 5　高橋種苗店による行商用種子の発注者と郵送先（1927～36年）

資料：高橋家所蔵「大福帳」

けたもンでがンしたな。お互いに行商の縄張りというものがあってなッす。それを侵さねェァように商売するわけだなッす。青物町の人だちも，下川原の人だちも，だいぶ種物の行商に出掛けたもンでがンすよ。まず下北半島の川内とか田名部，あるいは鹿角とか三本木方面など，主として旧南部領が多かったと思いあンすな。

実際，図５に示した21名の多くは，昭和２～11（1927～36）年の間，旧盛岡藩領内を中心とする特定の地域を，夏野菜と秋冬野菜の播種期に先立つ４月と７月の年２回，複数年にわたって行商しており[23]，個々の行商人が「縄張り」と呼ばれる行商範囲をもっていたとする高橋吉兵衛の叙述を，「大福帳」の記載からも追認することができる。さらに高橋吉兵衛は，「大根の実がなると，収穫期にはもう一日も早くといって，急いで種をとったもンでがンす。何しろ秋田の生保内（現，仙北市）方面の人だちなどは，一日も早く手に入れようというので，わざわざ泊まって待っていたもンでがンすからな」[24] とも述べている。このことから，図５で確認できる行商範囲以外の地域からも，仙北町へ直接野菜種子を買い付けに来ることで，高橋種苗店から野菜種子を入手する地域が存在していたことがわかる。

表３は，上記の行商従事者のうちの６名と旧盛岡藩領内の種苗業者７軒について，昭和３（1928）年に高橋種苗店から出荷された野菜種子の品目および品種とその数量を示したものである。これによれば，高橋種苗店が，盛岡近在や旧盛岡藩領の取引相手に対し，南部ゴボウやタマナなどの盛岡特産野菜のみならず，練馬ダイコン・滝野川ゴボウ（東京），宮重ダイコン・方領ダイコン（愛知），聖護院ダイコン・千筋キョウナ（京都），天王寺カブ（大阪），札幌ニンジン（北海道）など，日本

表 3　高橋種苗店による近在・旧盛岡藩領内への野菜種子の出荷（1928年）

（単位：升，小数点第 2 位以下四捨五入）

所在地	種苗業者		品種数	練馬ダイコン	美濃早生ダイコン	宮重ダイコン	方領ダイコン	時無ダイコン	聖護院ダイコン	二十日ダイコン	日本ニンジン	札幌ニンジン	南部ゴボウ	滝野川ゴボウ
盛岡市内	A：宮野勘次郎	行商人	31	0.5	1.5		10.0	5.2	13.1	2.5	5.5	16.0	0.4	6.0
	B：植村一郎		32		2.0		16.0	5.8	6.0	1.5		27.0	5.0	
	C：大ヶ生善次郎		33	13.0	6.0		8.0	5.0	4.0	1.0		28.0	2.0	
	D：菊地吉右衛門		41	52.7	2.0		15.0	6.5	39.0	3.0	5.0	4.0		7.0
	E：高橋与右衛門		35	17.0	1.5	6.6	2.4	3.5	5.8	0.1		60.0	1.0	1.5
	F：松岡孫次郎		12	10.0	1.0	1.5	12.0		23.0			25.0		
旧盛岡藩領内	G：内川戌松	種苗店	14	5.5	1.0	3.5	2.0		2.5		5.0	16.0		
	H：菊地民次郎		17	20.0		7.2	3.0	4.0	6.5					
	I：照井庄蔵		4										3.5	
	J：川辺惣之助		9					1.2				10.0		
	K：及川長作		17	13.0		12.0		13.0		2.0		20.0		
	L：盛田喜兵衛		21	25.0					3.3			80.0	20.0	
	M：山川兼松		28	15.1				1.0	5.0	0.4		13.5	4.3	
計				171.8	15.0	30.8	68.4	45.2	108.2	10.5	15.5	299.5	36.2	14.5

	赤丸カブ	天王寺カブ	結球ハクサイ	盛岡サントウサイ	タイサイ	雪白タイサイ	千筋キョウナ	夏ナ	タマナ	日本ホウレンソウ	西洋ホウレンソウ	地キュウリ	日本カボチャ	長ユウガオ	その他
A		0.2	3.2		1.0	5.5	0.2		0.1		5.0		0.1	1.0	5.7
B	1.0	1.2	4.7	10.0		3.0	0.6	0.5	0.3	2.5		1.0		2.5	10.2
C	12.5		3.0	15.0		6.0	1.5	1.0	1.0	1.0	5.0	2.0	0.5	2.0	4.0
D	11.0	1.0	16.5	10.0		5.0	2.0	1.5	0.4	1.0	5.5	4.0	1.0	16.0	8.1
E		4.0	2.9	33.8	1.2	1.5	0.8		2.0	3.8		0.5	0.1	1.5	1.9
F	5.0		3.0	1.0	3.0	3.0									
G		1.0	1.0						0.3						3.6
H	4.0	14.0	3.5	37.0	3.5	1.0				1.0	5.0	2.5			0.8
I									21.3	15.0					1.4
J				1.0					2.2		3.5	2.3	150.0		0.2
K	2.0			37.0	16.0		126.0	25.0	14.5			8.2			6.3
L	1.0			42.0	2.0	8.0	3.5		1.0		15.0		2.0		12.2
M		3.0	0.5	8.5	1.0		0.2	0.3	0.8			2.7	0.1	1.0	3.8
計	36.5	24.4	38.3	195.3	27.7	33.0	134.8	28.3	43.9	24.3	39.0	23.2	153.8	24.0	58.2

資料：高橋家所蔵「大福帳」

＊その他：夏ダイコン 1 件(0.5)，五寸ニンジン 4 件(4.6)，三寸ニンジン 2 件(1.7)，白丸カブ 3 件(3.1)，長カブ 2 件(0.6)，仙台カブ 2 件(3.7)，聖護院カブ 4 件(1.8)，タカナ 4 件(1.4)，盛岡バショウナ 5 件(2.5)，茎立ナ 4 件(3.3)，ネギ 3 件(2.3)，太ネギ 5 件(3.0)，タマネギ 2 件(0.3)，火焔ナ 3 件(4.3)，タマチシャ 1 件(0.1)，シュンギク 7 件(4.6)，シソ 2 件(0.3)，仙台ナス1件(1.4)，南部長ナス4件(0.7)，気仙キュウリ1件(0.1)，会津キュウリ2件(1.3)，加賀キュウリ1件(1.0)，札幌キュウリ 2 件(3.5)，西洋カボチャ 2 件(1.5)，糸カボチャ 2 件(0.4)，南部キンカ 4 件(3.1)，西洋スイカ 7 件(3.2)，砂糖スイカ 3 件(0.9)，白ウリ 2 件(0.7)，丸ユウガオ 2 件(0.6)，大ナンバン 3 件(0.3)，長ナンバン 5 件(1.1)，天向ナンバン 1 件(0.1)，トマト 4 件(0.4)

各地の地方品種を含む，実に多彩な種類の野菜種子を出荷していたことがわかる。

個々の品目ごとの出荷数量は，取引相手によってそれぞれ異なるが，練馬ダイコンや方領ダイコン，聖護院ダイコン，札幌ニンジン，盛岡サントウサイなどの種子は，多くの取引相手へ大量に出荷されていることから，需要の高い品目であったとみられる。一方，南部ゴボウや南部長ナス，南部キンカなど，盛岡特産野菜の種子の出荷量が概して少ないように思われるが，これらの品目については，近在農家自身が採種に携わっている場合が多いためであろう。実際に高橋種苗店では，これらの品目の種子を近在農家から入荷している記載が多数みられるが，これはおそらく，近在農家が，行商による自身の販売予定量を確保した上で，その余剰分を高橋種苗店へ出荷していたものとみられる。

また，出荷量はごく少量ながら，明治以降に日本へ導入された外来野菜である二十日ダイコンや結球ハクサイ，トマトなどの種子が，とくに行商人に対して出荷されている点が注目される。とりわけ結球ハクサイは，昭和3（1928）年よりも数年前の大正期末に，ようやく本格的な生産地域の成立をみたばかりで，都市市場への供給も緒に就いたところであった[25]。近在農家による野菜種子の行商の記録から，日本各地の地方野菜品種や日本において実用化されて間もない外来野菜の種子が，昭和初期においてすでに，旧盛岡藩領内の山間部や沿岸部などへもたらされ，自給的に栽培・消費されていたことが示唆される。

以上のことから，高橋種苗店は，旧盛岡藩領の在町に立地する種苗業者と取引関係を結び，これらの業者が販売するための，多彩な種類の野菜種子を供給する役割を果たしていたといえる。また高橋種苗店は，野菜種子の行商をしていた近在農家に対しても，同様に多彩な種類の野菜種子を供給した。そして彼らは，旧盛岡藩領内の種苗業者不在地域とみられる山間部や沿岸部において，種苗業者の商圏の隙間を埋めるように特定の商圏をもち，野菜種子に対する末端需要に応えていた。つまり高橋種苗店は，旧盛岡藩領内における野菜種子流通において，その供給拠点としての機能を果たしていたといえる。

（3）地域農業の牽引役としての機能

仙北町周辺の種苗業者や篤農家らが，いち早く西洋野菜であるキャベツの採種を開始して，明治37（1904）年に国産品種である「南部甘藍」が育成されたことは，先述したとおりである。盛岡周辺地域においてキャベツは，冬季に貯蔵可能な野菜として，「玉菜」の呼称を付与され，当該地域の食生活に深く根ざす一方，東京をはじめとする大都市市場での需要の拡大を背景に，大正期に入る頃から盛岡近郊や紫波郡で生産が盛んとなり，全国でも先駆的な輸送園芸作物となった[26]。

実際，高橋種苗店においても，大正2（1913）年当時すでにタマナの原種を保持し，近在農家へ採種を委託していたことも，すでに検討した通りであり，高橋種苗店が盛岡近在のタマナ生産の普及に一定の役割を担っていたことが示唆される。ここでさらに注目すべきは，大正2年当時，日詰町の内川戌松，二子村の及川長作，宮古町の盛田末吉，三戸町の山川菊松らに対し，タマナの原種を出荷していた事実である（表1参照）。しかもこの4軒へ原種として出荷される品目が，内川を除きタマナに限定されること，高橋種苗店のタマナ原種の出荷量全体うち7割以上が，及川に出荷されていることは，タマナの需要が盛岡近郊の範囲を超え，とくに盛岡以南の地域へ拡大していたことを示している。また同時に，高橋種苗店が原種の供給を通して，盛岡近郊以外の地域へのタマナ生産の普及にも深く関わっていたことが指摘できる。

高橋種苗店では昭和期に入って，上記の業者以外に，花巻町の照井庄蔵，石鳥谷町の菊

地民次郎などへもタマナの原種の出荷範囲を拡げた。昭和3（1928）年の出荷記録からは，この照井庄蔵と及川長作に対して，とくに大量のタマナ種子を出荷していたことも確認できる（表3参照）。また，大正13（1924）年以降における高橋種苗店の取引相手を記載した「芳名録」には，「南部甘藍栽培者」，「甘藍種子入用者」，あるいは単に「玉菜苗」などと特記された取引相手が，花巻町や岩手郡渋民村，好摩村，大更村，田頭村，上北郡下田村，上閉伊郡青笹村にみられる点が注目される（図4参照）。岩手県における大都市市場向けのキャベツ生産地域は，昭和期に入る頃から，東北本線沿線の花巻町周辺や，沼宮内，奥中山を中心とした岩手郡，二戸郡，三戸郡，あるいは花輪線沿線や釜石線沿線に拡大していった[27]が，昭和初年に高橋種苗店がキャベツの種苗を出荷していた地域は，いずれもこの時期にキャベツ生産が拡大した地域と符合している。とくに盛岡以北では，遅霜による被害を避けるため，盛岡市内で栽培したタマナ苗を購入し，6月中旬頃に定植することが広く行われていた[28]。

以上の事実は，高橋種苗店が，岩手県における大都市向けキャベツ生産地域の展開過程において，導入から国産品種育成に至る初期の段階に引き続き，その後の生産地域の成立・拡大に至る段階においても，キャベツの種苗を提供することを通して，深く関与していたことを示すものといえる。とくに岩手県のキャベツ生産地域では，民間の仲買商人の関与が先行し，岩手県立農事試験場や岩手県農会などの公的機関の関与が後発的であったことが指摘されている[29]。実際，高橋種苗店の「芳名録」には，上記のキャベツ生産に関わる取引相手以外にも，「蔬菜園芸組合長」，「青果物出荷組合長」，「農会技手」などと特記されたものが散見される。大正期から昭和戦前期における都市化の進展は，野菜類の需要の増大をもたらし，その結果として多くの地域で，野菜類の商品化による農業生産の向上が模索された。キャベツ生産地域への高橋種苗店の関与は，まさに野菜類の商品化を志向する地域の農業生産に新機軸をもたらし，地域農業を牽引する役割を，種苗業者が担っていたことを示すものであろう。

Ⅳ．野菜種子の全国的流通網における盛岡の位置づけ

前章で提示された，盛岡市仙北町の種苗業者の多面的な機能は，同時代の他地域の種苗業者と比較した場合，いかに位置づけられるであろうか。以下では，高橋種苗店と本州以南および北海道の種苗業者との取引に着目しながら，全国レベルの野菜種子流通のネットワーク上における盛岡市仙北町の種苗業者の特質を抽出していきたい。

（1）伝統的中心地としての歴史的基盤

図6は，本州以南における高橋種苗店の取引相手を示したものである。高橋種苗店では大正2（1913）年当時，東京，京都，大阪および会津，金沢，八街（千葉県印旛郡）などの種苗業者と取引関係があった。その後大正15（1926）年以降には，上記に加え，岩手県に隣接する青森，秋田，宮城の各県の諸都市や，新潟，長岡，大宮（埼玉県北足立郡），粕壁（同県南埼玉郡），尾張一宮（愛知県中島郡），古知野（同県丹羽郡），富田林（大阪府南河内郡）など，さらに昭和6（1931）年以降になると，諏訪（長野県諏訪郡）や広島，高松，福岡などの西南日本の諸地域の種苗業者が新たに確認できる。

これらの取引相手の所在地に着目すると，八街のように近代以降に開発され，新たに採種地となった地域も一部含まれるが，大多数は，三都をはじめ，弘前，秋田，仙台，会津，長岡，金沢などの雄藩の城下町，新潟や能代といった港町など，伝統的な都市である場合が多い。これらは，程度の差こそあれ，

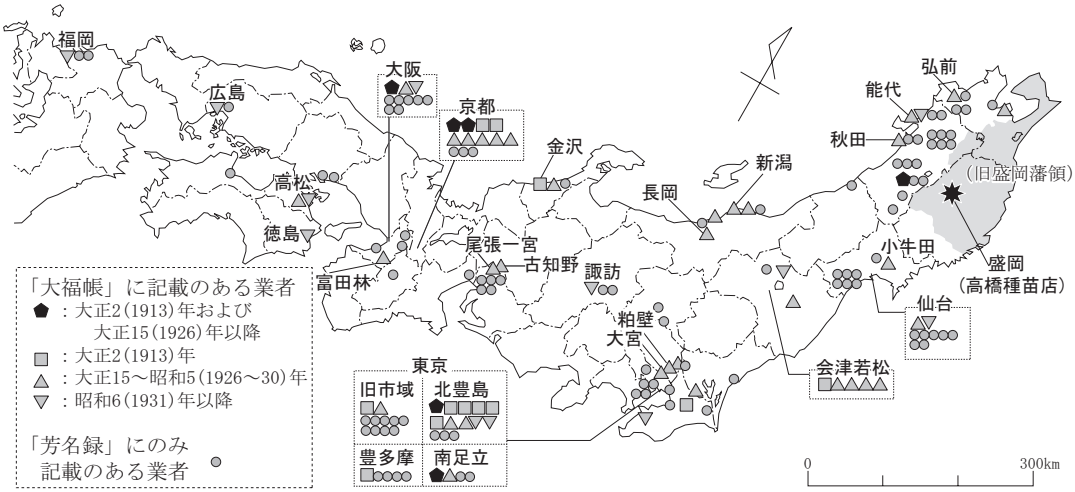

図 6　本州以南における高橋種苗店の取引相手（1913～35年）
資料：高橋家所蔵「大福帳」および「芳名録」

いずれも近世期においてすでに，都市近郊野菜生産地域を成立させた都市であり，名古屋近郊の伝統的な採種地である尾張一宮や古知野なども含め，近世以来の野菜生産地域や野菜種子の採種地である。したがって，こうした都市近郊に存立する種苗業者は，盛岡市仙北町の種苗業者と同様の歴史的基盤をもつとみなすことができる。

表 4 は，本州各地の種苗業者から高橋種苗店への入荷品目を示したものである。これにより，高橋種苗店では，図 6 で確認されるよりもさらに以前の明治後期において，東京府滝野川の榎本銈太郎ほかから練馬ダイコンや滝野川ゴボウ，千住ネギ，京都の滝井治三郎ほかから聖護院ダイコン，時無ダイコン，聖護院カブ，九条ネギ，大阪の金沢茂七から白ウリ，名古屋近郊枇杷島の横山喜助から宮重ダイコン，会津の加藤清作から節成キュウリ，金沢の松下仁右衛門から加賀キュウリなどを入荷していたことがわかる。これらは，昭和期に入って新たに入荷が確認される，会津の会津キュウリ，新潟の寄居カブ，刈羽キュウリ，高田シロウリなどとともに，伝統的な都市の近郊に成立した野菜生産地において育成された在来の地方品種である[30]。

一方，東京の種苗業者らから入荷されるサントウサイ，タイサイ，朝鮮ハクサイ，西洋スイカ，粕壁の時田源三から入荷されるチシャ，パセリなどは，近代以降に日本へ導入された外来野菜であり，小牛田（宮城県遠田郡）の渡辺穎二の松島ハクサイ，大阪の金沢茂七の黄タマネギ（泉州タマネギ），富田林の稲本　栄の大和スイカなどは，それぞれ松島湾内の島嶼部，大阪泉南地域，奈良盆地において，外来品種をもとに育成した国産品種である[31]。つまり高橋種苗店では，京阪以北の本州諸都市の種苗業者から，各地域の特産野菜の種子を入荷していたことになる。

ところで，盛岡もまた，南部ゴボウ，南部長ナス，南部キンカに代表される在来の地方品種や，南部カンランや盛岡サントウサイなど，近代以降に外来野菜をもとに育成した国産品種が多数存在する地域であり，後述するように，高橋種苗店からも上記の本州諸都市の種苗業者に向け，盛岡特産野菜の種子が盛んに出荷されていた。すなわち，盛岡と上記

表 4　高橋種苗店における本州各地からの主な入荷品目（品種）

	所在地	種苗業者	入荷品目（品種）
A期	会津	加藤清作	赤茎ニンジン・節成キュウリ・長ユウガオ・白種スイカ
	東京	榎本銈太郎	西洋スイカ・縞ウリ
		鈴木八五郎	練馬ダイコン・朝鮮ハクサイ・カラシナ・西洋スイカ
		清水由右衛門	練馬ダイコン
		磯貝唯吉	花絵袋
		清水権右衛門	豊年ウリ
		戸部銀二郎	朝鮮ハクサイ・タイサイ
		種屋仲右衛門	練馬ダイコン・美濃早生ダイコン・二十日ダイコン・滝野川ゴボウ・サントウサイ・タイサイ・シュンギク・千住ネギ・西洋スイカ・丸ユウガオ
		谷本清兵衛	大ヒョウタン
	金沢	松下仁右衛門	加賀キュウリ
	枇杷島	横山喜助	宮重ダイコン
	京都	大島徳兵衛	聖護院ダイコン・聖護院カブ
		滝井治三郎	聖護院ダイコン・時無ダイコン・聖護院カブ・天王寺カブ・九条ネギ
		滝井作次郎	聖護院ダイコン・聖護院カブ
	大阪	金沢茂七	黄タマネギ・白ウリ
B期	小牛田	渡辺穎二	松島ハクサイ
	会津	菊地文右衛門	会津キュウリ・甘栗カボチャ・長ユウガオ・丸ユウガオ
		横山保喜	赤筋ダイコン・会津ニンジン・会津キュウリ・甘栗カボチャ
		池田易次	会津キュウリ
	粕壁	時田源三	日本ホウレンソウ・チシャ・パセリ・千成ナス
	東京	帝国種苗殖産	朝鮮ハクサイ・長ユウガオ・縮緬カボチャ・絹莢エンドウ
		種屋仲右衛門	練馬ダイコン・滝野川ゴボウ・朝鮮ハクサイ・千住ネギ・コマツナ
		種甚商店	日本ホウレンソウ・花絵袋
	新潟	関口松蔵	寄居カブ・雪白タイサイ・刈羽キュウリ・高田シロウリ
	長岡	石坂三次郎	高田シロウリ・エンドウ
	諏訪	渡辺通衛	信州大長ニンジン
	一宮	舟橋愛十郎	方領ダイコン・美濃早生ダイコン・青首尻長ダイコン
	古知野	古田代助	方領ダイコン・美濃早生ダイコン
	京都	高山種苗園	聖護院ダイコン・時無ダイコン・千筋キョウナ
		滝井弥右衛門	聖護院ダイコン・時無ダイコン・聖護院カブ・壬生菜・獅子ナンバン
		田中滝之助	時無ダイコン・千筋キョウナ・大ヒョウタン・千成ヒョウタン
	富田林	稲本　栄	大和スイカ・日本ホウレンソウ・西洋ホウレンソウ

資料：高橋家所蔵「大福帳」
＊A期：明治42～大正6（1909～17）年
　B期：昭和2～10（1927～35）年

の諸都市に共通する点は，以下の3点といえよう。第一に，近世都市の成長に伴う近郊野菜生産地域が成立した結果，野菜種子の商品化が進んで，野菜種子専門業者が出現したこと[32]，第二に，種苗業者を紐帯として地域の風土や都市住民の嗜好に対応した特産品種が育成されたことである。さらに第三には，明治期以降，鉄道網や郵便制度の整備を背景として，諸都市の種苗業者は，遠隔地の種苗業者との間で相互に特産品種を交換し，自身が取り扱う品種を一層多様化させたことである。ちなみに，仙北町では大正4（1915）年に仙北町駅が開設され，このことが野菜種子の遠隔地への出荷を活発化させる契機となったともいわれている[33]。

つまり，盛岡は，野菜種子の全国的な流通網において，上記のような伝統的中心地という歴史的基盤をもつ地域の一つとして，確固たる地位にあったといえる。

（2）本州と北海道を繋ぐ結節点

北海道において，野菜種子の行商を開始した人物は，盛岡出身の狭間権七であったといわれている[34]。狭間は，明治5（1872）年に，初めて北海道に渡って野菜種子を行商し，その後，明治13（1880）年頃には，札幌に移住して種苗業者を創業した。また高橋吉兵衛も，「わたしの家の向かいの人は，北海道サいって種物屋をやってなッす。そこから種物の注文がきたもンでがンしたが，この人は北海道の種物屋の草分けだったと思いあンすな」[35]と述べている。さらに，青物町の鈴木米吉が函館周辺において野菜種子の行商をしていたことも，先述したとおりである。高橋吉兵衛がいう「北海道の種物屋の草分け」が，この狭間権七であるか否かは特定できないが，いずれにしても仙北町の種苗業者は，開拓に着手して間もない明治のごく初期の段階から，北海道における野菜種子流通の先駆的な担い手であったことは間違いない。そして，その

地縁的なネットワークを足がかりとして，高橋種苗店も北海道への野菜種子出荷の地歩を固めていったことがわかる。実際，高橋種苗店に所蔵されている明治末から大正期の「大福帳」6冊のうち，5冊までが北海道における取引について記載したものである。このことから類推すると，高橋種苗店の経営において，北海道との取引の比重は，決して小さくはなかったものとみられる。

図7は，北海道における高橋種苗店の取引相手を示したものである。これによれば，高橋種苗店は明治末期においてすでに，北海道西岸の港町や鉄道駅所在地などの交通結節点を中心として，広範囲に多数の取引相手を持っていたことがわかる。「大福帳」の記載により，北海道への野菜種子の出荷においては，明治42（1909）年の時点から農産種子に適用される第五種郵便を利用していることが確認でき，明治41（1908）年の青函連絡船の開通や北海道開拓の進展とも相まって，盛んな取引の状況がうかがえる。

昭和期には，札幌や旭川，野付牛，樺太南部の留多加などで，新たな取引相手の獲得が確認できるが，明治末から大正期と比較して，取引相手が減少していることがわかる。この理由としては，「大福帳」に種子料金の

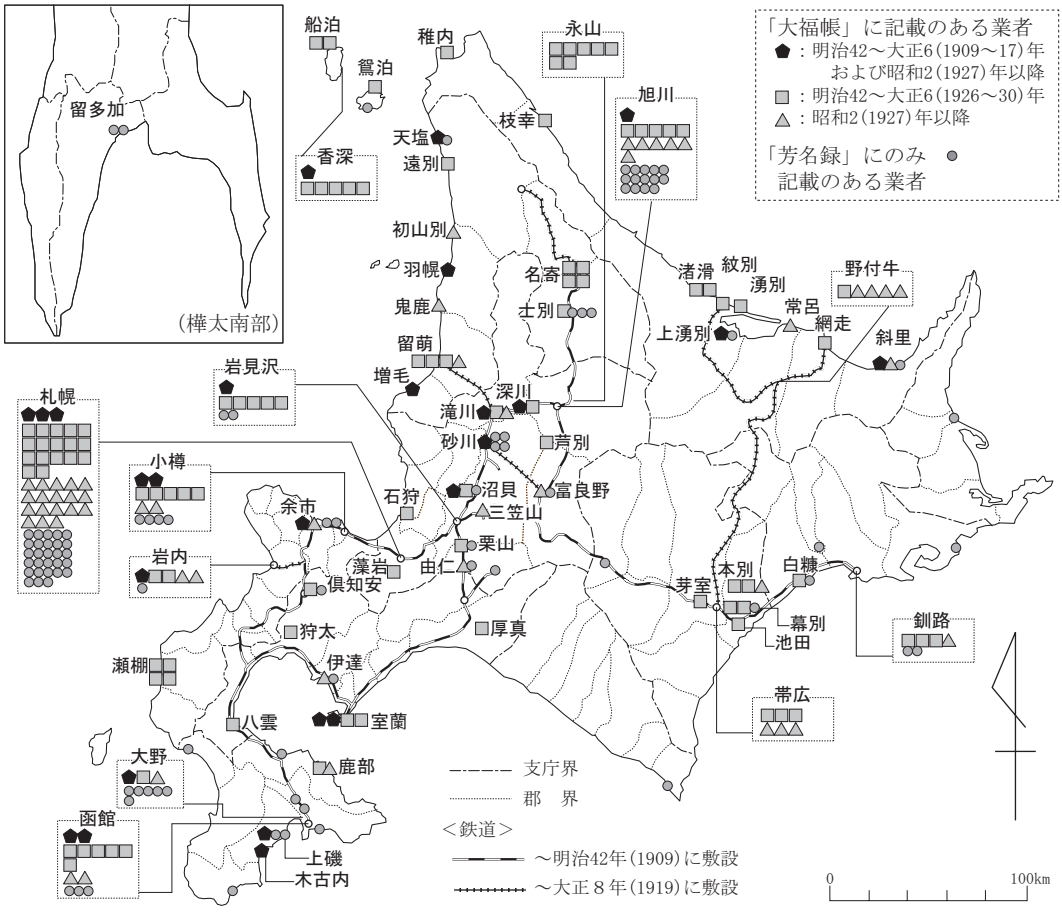

図7　北海道における高橋種苗店の取引相手（1909～35年）
資料：高橋家所蔵「大福帳」および「芳名録」

滞納や取引停止の記録が頻繁にみられることから，農業経営基盤の脆弱さなどにより取引相手が没落したこと，あるいは，本州諸都市の種苗業者が明治末から大正期にかけて，北海道へ新規参入したこと[36] などが考えられる。

表５は，高橋種苗店が明治44（1911）年に，北海道の取引相手に対して出荷した野菜種子の品目および品種とその数量を示したものである。まず注目すべきは，高橋種苗店の野菜種子の出荷相手の中に，札幌の札幌興農園，綾田貫伍，本郷敏慎などが含まれている点である。札幌興農園は，東京興農園の札幌支店として，明治27(1894）年に設立した種苗業者であるが，その経営者は札幌農学校出身の小川良二であった。また綾田，本郷も草創期の札幌農学校出身者であり，彼らは北海道における種苗業発展の功績者と位置づけられている[37]。このことは，北海道における本格的な種苗業の進展は，彼らの起業を待たねばならなかったことを示しており，開拓当初における北海道の野菜種子の需要を賄う存在として，盛岡出身の種苗業者が機先を制して参入する余地があったといえる。

次に出荷品目に着目すると，南部キンカの出荷量が群を抜いて多く，ゴボウ，時無ダイコン，地キュウリ，長ナスなど，盛岡特産品種が多く出荷されている。また，山形県庄内地方特産の民田丸ナスや越後カブ，仙台カブ，気仙キュウリ，会津キュウリなど，寒冷地の地方品種の存在が目立っている。これは，北海道では，冷涼な自然環境に適した品種に対する需要が高かったことを示しているとみられる。そこで高橋種苗店では，盛岡で採種される盛岡特産品種に加え，東北諸県や新潟県から地方特産品種を取り揃え，北海道における在来野菜の種子の需要に応じたのであろう。

表６は，北海道の種苗業者から高橋種苗店への入荷品目を示したものである。これらのうち，北海道における数少ない在来品種である大野赤カブを除けば，二十日ダイコン，西洋ニンジン，タマナ，タマネギ，西洋ホウレンソウ，札幌トマトなど，北海道開拓で採用された欧米式農法の所産である西洋野菜の種子が大多数を占めている。こうしてみると，とくに西洋ニンジンについて，高橋種苗店では大正２（1913）年当時から原種を保持して近在農家に採種を委託したこと（表１参照），その後昭和３（1928）年頃には，近在農家による行商を通じて，旧盛岡藩領内に大量の種子が販売されたこと（表３参照）などの背景には，高橋種苗店と北海道の種苗業者が，明治末期以前から取引関係を結んでいた影響が強いとみられる。

最後に，高橋種苗店を介在した本州と北海道との野菜種子の取引について，本州各地に地方品種が存在するキュウリ，盛岡特産野菜の一つである南部キンカ，北海道で育成された西洋ニンジンを例として，総括しておきたい（図８）。

高橋種苗店では上記３品目のうち，キュウリの種子は，会津の会津キュウリや新潟の刈羽キュウリ，金沢の加賀キュウリなど，複数の地方品種を本州各地から入荷し，他方，西洋ニンジンの種子は，北海道の札幌や岩見沢などから入荷していた。キュウリと西洋ニンジンの種子はともに，旧盛岡藩領内において域内消費されるだけでなく，前者は北海道各地の種苗業者へ，後者も東京の中核的な種苗業者を中心にそれぞれ，再出荷された。合わせて高橋種苗店では，南部キンカに代表される盛岡特産野菜の種子を本州と北海道の双方へ盛んに出荷していた。このことから，盛岡は，独自の特産野菜品種をもつ伝統的中心地の一つであることに加え，本州と北海道とを繋ぐ種子流通の結節点としての機能をも有していたことが指摘できる。

表 5　高橋種苗店による北海道への野菜種子の出荷（1911年）

（単位：升，小数点第 2 位以下四捨五入）

所在地	種苗業者	品種数	時無ダイコン	ゴボウ	西洋ニンジン	タイサイ	長ナス	民田丸ナス	地キュウリ	西洋スイカ	南部キンカ	長ユウガオ	その他
札幌区	綾田貫伍	2											7.1
	小林スエ	6	5.0	10.0			3.0	5.0			6.8		1.0
	齋藤末吉	3							7.5		23.0		4.0
	札幌興農園	2					3.0				30.0		
	鈴木芳蔵	3		1.0		0.2							0.2
	藤田寅治	15		20.0			1.5	2.0	4.0	2.0	15.0	5.5	7.0
	細川初太郎	10	40.0	40.0					13.0	5.0	45.0	11.7	36.3
	本郷敏慎	4	13.0					3.0			8.1	3.0	
豊平町	鈴木良雄	11		10.0			0.5	3.0		2.0	10.0	4.0	8.5
	板東又吉	6									5.0	1.0	5.0
	吉田三蔵	2									95.0		16.0
石狩町	田中伍幣	9	1.0	2.0	2.0			1.0	3.8		2.0		1.5
岩見沢町	今井商店	1											5.0
	永井輝吉	10				10.0	6.0	7.8	25.0		100.0		41.0
滝川町	土井常松	2									23.6		1.0
旭川町	岩田和三郎	9	8.0	5.0				1.5		2.0			7.0
	佐々木平蔵	3		10.0							3.0		3.0
	寺町熊八	4		13.7		1.0	0.5				30.0		
永山村	小林銀吉	8				6.0			1.0		4.0	1.5	8.3
	森重重吉	2									10.0		1.0
小樽区	金沢徳次郎	4	2.0	2.0							1.0		1.0
	笹田猪之太	8		10.1			13.1	1.1		64.6	25.0	1.5	1.3
	長井三六	5					10.4	2.0			43.4		1.4
	渡辺重吉	6	10.0	15.0			2.0				52.7		1.5
余市町	村瀬丑太郎	5					1.5	0.5	2.0				1.5
瀬棚村	青木馬太郎	13	2.0	1.5	3.0	3.0	0.1		0.5		0.2	1.5	2.7
	猪俣清太郎	3			1.0	1.0							0.5
	森山辰次郎	3				1.0							1.3
函館区	内沢金太郎	1					2.0						
	荻野金太郎	7	0.4	2.0					2.6		1.0		2.0
大野村	島津清五郎	2					3.0						7.0
士別村	黒田豊太郎	6							1.0	1.0	1.0		8.0
増毛町	黒田金六	10	1.5	10.0						2.0	65.0	1.0	3.3
留萌町	幸田忠作	5		10.0				1.0		3.0	30.0		1.0
羽幌村	油木久松	16		2.0		4.0		2.5	2.0	1.0	21.7	0.5	14.8
虻田村	佐藤倉治	13	2.0	2.5	2.0	1.0				1.0	1.9	1.2	2.5
狩太村	高久主税	8	8.9			0.3					2.0		2.0
八雲村	松田和助	3	1.0			3.0							3.0
稚内町	西田末吉	4	1.0			3.0							2.5
香深村	板垣陽一	11	1.5	4.0	11.0				1.5				5.4
	蟹谷直次郎	13	1.5	5.0	5.0	6.0		0.3			0.3		8.8
本別村	佐々木平左衛門	10	1.0	2.0	10.0			0.6		2.0	2.0	1.0	3.6
	土井孝吉	6	2.0		0.5						2.0		3.5
幕別村	廻淵外次郎	14	3.0		15.0	2.0			1.5	2.0	1.5	1.0	11.0
	渡辺宝泉	2				1.0							0.1
不明	名和庄太郎	9				1.0		0.2		0.1	0.2		2.3
計			104.7	177.8	49.5	43.5	46.6	31.4	65.4	87.7	661.2	34.4	244.9

資料：高橋家所蔵「大福帳」

＊その他：夏ダイコン 5 件(4.4)，二十日ダイコン 4 件(4.0)，赤カブ 5 件(7.4)，大野赤カブ 1 件(4.0)，仙台カブ 4 件(23.0)，越後カブ 8 件(8.1)，天王寺カブ 3 件(16.5)，タマナ 3 件(2.1)，朝鮮ハクサイ 1 件(3.4)，サントウサイ 1 件(10.0)，キョウナ 7 件(7.8)，バショウナ 3 件(4.5)，雑ナ 5 件(17.0)，シュンギク 4 件（14.7)，シソ 3 件(2.2)，ネギ 3 件(2.5)，タマネギ 6 件(4.6)，気仙キュウリ 4 件(11.0)，会津キュウリ 5 件（12.1)，カボチャ 6 件(25.8)，日本スイカ 8 件(11.8)，白ウリ 4 件(1.7)，縞ウリ10件(22.5)，丸ユウガオ 1 件(1.0)，長ナンバン10件(15.3)，天向ナンバン 9 件(8.0)，トマト 1 件(2.1)

表 6　高橋種苗店における北海道からの主な入荷品目（品種）

	所在地	種苗業者	入荷品目（品種）
A期	札幌区	札幌興農園	札幌ニンジン
		細川初太郎	西洋ニンジン
		水落安太郎	西洋ニンジン・二十日ダイコン・札幌ニンジン・タマナ
	岩見沢町	永井輝吉	西洋ニンジン・札幌ニンジン・タマネギ
		尾藤鎌吉	西洋ニンジン・札幌ニンジン
	滝川町	土井常松	西洋ニンジン・タマナ・タマネギ
	余市町	村瀬丑太郎	西洋ニンジン・タマナ
	大野村	米内留次郎	大野赤カブ
B期	札幌区	札幌興農園	タマナ・パセリ・札幌黄タマネギ・五寸ニンジン
		札幌農業商会	三寸ニンジン
		大橋　寛	タマナ・エンドウ
	豊平町	北海道中央農園	札幌ニンジン・五寸ニンジン・二十日ダイコン・タマナ・タマネギ・札幌節成キュウリ
	小樽区	齋藤順次郎	三寸ニンジン・タマナ・札幌トマト
	本別村	佐々木平左衛門	西洋ホウレンソウ・ブロッコリー

資料：高橋家所蔵「大福帳」
＊A期：明治42～大正６(1909～17)年　B期：昭和２～10(1927～35)年

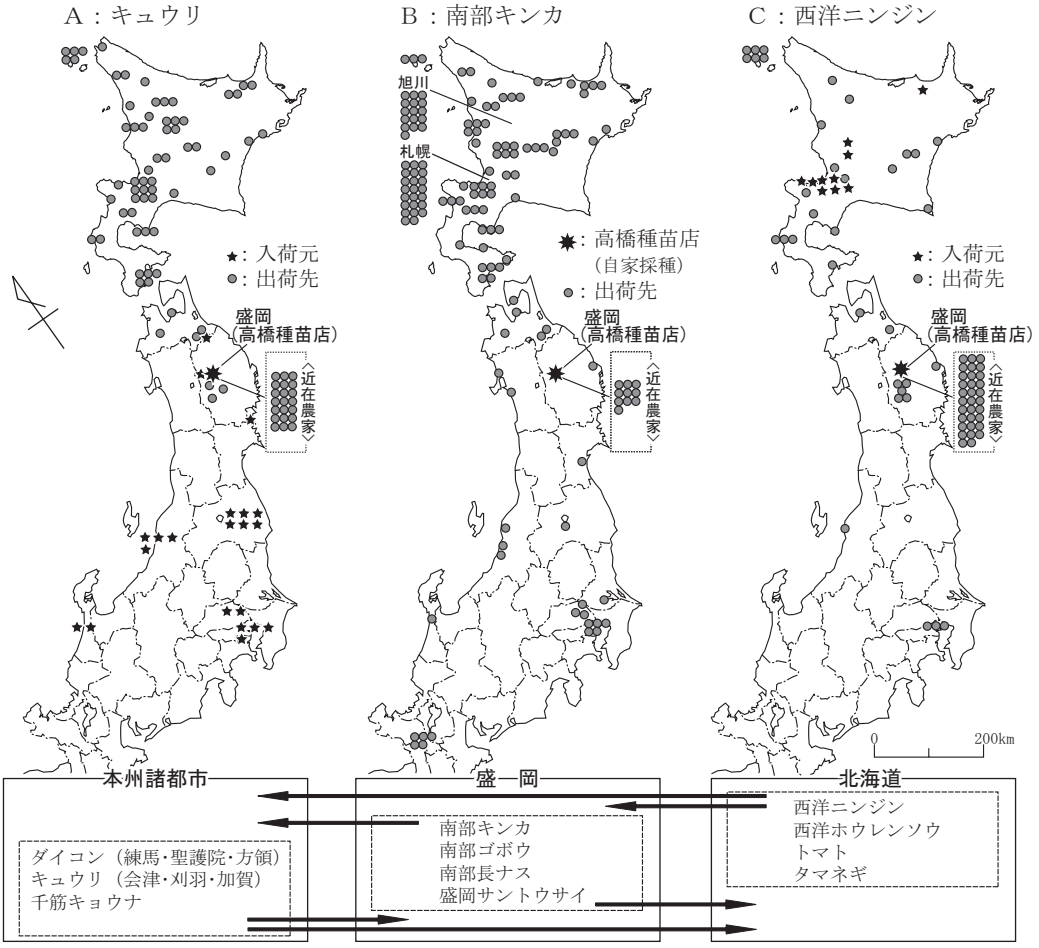

図 8　高橋種苗店を介した本州・北海道との種子取引－キュウリ・南部キンカ・西洋ニンジンの場合－
資料：高橋家所蔵「大福帳」

Ⅴ．おわりに

本稿は，盛岡市仙北町の種苗業者である高橋種苗店を事例として，地方都市近郊に存立する種苗業者とその周辺地域が，野菜種子の流通や育種・採種において有していた機能を検討することにより，近代日本における野菜種子流通の特質を明らかにすることを目的とした。その結果は，以下の通りである。

まず，旧盛岡藩領内における高橋種苗店の野菜種子取引の分析から，同店は，地方都市近郊に存立する種苗業者として，近在農家に対し，野菜生産に用いる種子を提供するのみならず，周辺の在町の種苗業者や，種子の行商に携わる近在農家に対して，多彩な野菜種子を出荷していた。このことにより同店は，旧盛岡藩領内への野菜種子供給の拠点としての機能を果たしていたことが判明した。また，仙北町周辺は，高橋種苗店以外にも，複数の種苗業者や篤農家など育採種技術を保持する民間育種家が多数存在する地域であった。同店では，その集積のメリットを活用しつつ，特産品種の育成や，近在農家への委託採種による野菜種子の量産など，近在農家と有機的に結びついた野菜育採種業地域を形成し，その紐帯としての機能を果たした。以上の事実は，地方都市近郊に存立する種苗業者が，近代日本において，野菜種子の小売部門にとどまらず，卸売部門，あるいは育種・採種部門を兼ね備えた多面的な機能を有していたことを示している。さらに同店は，岩手県におけるキャベツ生産地域の成立・拡大過程においても，キャベツ種苗を供給することなどを通して，地域農業を牽引する機能をも有していた。

一方，高橋種苗店は，在来の地方品種や近代以降に外来野菜をもとにした国産品種を育成し，盛岡特産品種として保持していた。また，高橋種苗店と取引関係にあった本州諸都市近郊の種苗業者についても，盛岡と同様，個々の地域の特産品種を保持する存在であった。高橋種苗店は，このような本州諸都市近郊の種苗店との取引において，相互に特産品種を交換し合うなど，野菜種子の全国的流通網を形成していた。これに加えて，高橋種苗店の経営においては，北海道との取引が重要な意味をもっていた。本州諸都市と北海道の双方に取引相手をもつ同店は，両地域を繋ぐ種子流通の結節点としての機能を有していた。

以上の事実を踏まえると，野菜種子流通における近代日本の特質として，以下の点を抽出することができる。まず一点目は，「一代交配種」への移行以前の時代においては，日本各地に多彩な地方特産品種（固定種）が存在したが，この時代は，地方種苗業者やその近在農家が自律的にその育種や採種に関与していた時代であったことである。その過程では，地方種苗業者と近在農家の双方が，採種に関する知識や情報を共有するネットワークを構築しながら，より商品価値の高い「固定種」の選抜，保持，改良などを行っていた。地方種苗業者は，このローカルなネットワークの紐帯となり，近在農家らを束ねる存在であったといえる。また，近代日本においては，北海道や下総台地，佐渡島などに大規模な企業的採種地域が形成されつつあった[38]。しかしながら，盛岡市仙北町の事例からは，そのような新たな採種地域の成立期以降にあっても，地方都市近郊に近世以来存立する野菜育採種業地域が，地方特産品種などの採種地として，依然，重要な機能を果たしていたことも，この時代の特質といえよう。

二点目は，近代において日本各地の地方種苗業者が，鉄道網や郵便制度を活用することで，ナショナルなネットワークを形成し，互いの地域の特産品種を盛んに交換していたことである。従来，主産地形成による野菜類の大量生産・大量流通が達成される以前の時代には，個々の地域では，その地域固有の地方

品種が生産・消費されてきたとみなされてきた。しかしながら，地域外の特産品種が地方種苗業者を介して，地域内にもたらされていた事実は，主産地形成以前の近代にはすでに，地域固有の地方品種にとどまらず，多様な野菜品種が広範に流通していたことを示唆している。

以上の点により，地方都市近郊に近世以来存立してきた地方種苗業者は，野菜種子の販売，育種および採種部門において，ローカルなネットワークとナショナルなネットワークの交点にあり，近代日本における重層的な野菜種子流通を主導する役割を果たしたと結論づけることができる。

しかしながら，近代日本における野菜種子流通の実態解明は緒に就いたばかりであり，残された課題も少なくない。今後は盛岡以外の諸都市近郊に存立する種苗業者と野菜採種業地域の動向を視野に含めつつ，分析・考察を進めていく必要がある。その際，近代日本において種苗業者の集積が最も顕著で，流通網においても最高レベルの中心性を有していた東京府滝野川の種苗業者に着目することは，地方種苗業者の資本力や経営規模を測る上でも有効であると考えられる。また，本稿で取り上げた盛岡にとって，北海道への野菜種子供給拠点であったことの意味を，今後あらためて検討する必要がある。そのためには，盛岡と同規模の地方都市の種苗業者との比較が有効な手立てとなるであろう。これらについては，他日を期したい。

〔付記〕

現地調査に際して，盛岡市仙北町の高橋種苗店の高橋　修社長には，貴重な資料の閲覧・撮影に御理解と御協力をいただきました。また，山田清之助商店の前澤　清社長，前澤マサ氏，同市神子田町の照井仁一郎氏をはじめ多くの方に御教示をいただきました。本稿の作成にあたり，筑波大学人文社会科学研究科在籍当時から，歴史地理学研究室の石井英也先生（当時），小口千明先生，中西僚太郎先生ならびに，浪川健治先生（日本近世史）に御指導をいただきました。英文要旨の校閲は，文教大学教育学部の三木一彦先生にお願いしました。なお本稿の骨子は2007年の歴史地理学会大会（於：國學院大学）において発表し，その際，諸先生方から有益な御助言をいただきました。以上記して厚くお礼申し上げます。

（（独）農研機構農村工学研究所）

〔注〕

1）①西　貞夫「野菜採種の変遷と現状」（そ菜種子生産研究会編『野菜の採種技術』，誠文道新光社，1978），1～57頁。②日本種苗協会編『日種協のあゆみ』，社団法人日本種苗協会，2008，47～66頁。③松下　良『加賀野菜　それぞれの物語』，橋本確文堂，2007，34頁。

2）① 尾留川正平「巨大都市市場との結合からみた日本の野菜園芸地域」，東京教育大学地理学研究報告Ⅵ，1962，179～225頁。②市川健夫『高冷地の地理学』，令文社，1966，99～207頁。③坂本英夫『野菜産地の立地移動』，大明堂，1977，157～266頁。

3）横山恵美「地域博物館における資料整理活動について―榎本泰吉家寄贈資料を例に―」，豊島区立郷土資料館年報11，1997，78～92頁。

4）豊島区郷土資料館編『一粒入魂～日本の農業をささえた種子屋』（2008年度企画展図録），豊島区立郷土資料館，2008，28頁。

5）農界新報社編『全国種苗業者人名録』，農界新報社，1918。同書には，蚕種，桑苗，果樹苗，山林苗などを取り扱う業者も掲載されているが，これらについては除いて集計した。また，当時の種苗業者がすべて掲載されているわけではない。したがって，実際に野菜種子を取り扱う業者数は，さらに多かったと考えられる。

6）社団法人日本種苗協会の公式ホームページ（http://www.jasta.or.jp/outline/）による（最終アクセス日：2009年8月1日）。

7）清水克志「日本におけるキャベツ生産地域

の成立とその背景としてのキャベツ食習慣の定着―明治後期から昭和戦前期を中心として―」，地理学評論81-1，2008，1～24頁。

8) ①「元治年間盛岡藩物産番付」，吉田義昭・及川和哉編著『図説　盛岡四百年　上巻』所収，郷土文化研究会，1983，296頁。同資料には，仙北丁（町）の大根種，冬うど，青物早出が前頭に格付けされている。　②岩手県『岩手県管轄地誌１岩手郡（一）』，東洋書院，2003（初版1879），282～283頁。同書には，仙北町の特産物として，蘿蔔（ダイコン），胡蘿蔔（ニンジン），蕪，水菜，茄子，甜瓜（マクワウリ），南瓜，芋ノ子（サトイモ），百合根（ユリネ），甘薯（サツマイモ），牛房，蒜，葱，夕顔，蕃椒（トウガラシ）および蘿蔔，蕪，胡蘿蔔，牛房，水菜，甜瓜，茄子，葱の種子が列挙されている。

9) 盛岡市仙北町の前澤マサ氏からの聞き取りによる。

10) 仙睦会五十周年記念誌編集員会編『わが町仙北町―仙睦会五十年の歩み―』，1987，72～73頁。

11) 盛岡特産の甜瓜（マクワウリ）のことで，南部金甜瓜，南部金瓜あるいは金皮味瓜などと表記された。

12) 盛岡市鉈屋町内に十文字の地名があり，同地には十文字稲荷社が存在する。

13) 金子才十郎『種子のロマン―日本種苗業界の歴史―　昭和前期篇』，カネコ種苗株式会社，1991，117～128頁。

14) 盛岡タイムス社『盛岡の老舗Ⅱ』，盛岡タイムス社，1997，104～107頁。

15) 長岡高人編『もりおか物語（四）―仙北町かいわい―』，熊谷印刷，1975，80頁。同書には，第二次世界大戦下で野菜種子の配給を担当したことについて，３代目吉兵衛自身が以下のように述べている。「この統制配給時代には，山清さんとわたしとが県サ呼ばれて相談をして，県内を九地区に分けて，実績のある人が地区担当者になって，県サ割当てられた一定量の種物を，さらに各地区に割当てて配給することになったが，それでもなかなか手に入らない時代だったからなッす。そのころは，わたしも県内に配給する種物を手に入れるために，関東や関西方面まで出かけていって，空襲の中でほんとうに苦労をしあンしたのす」

16) 「大正十三年三月吉日」とあるものの，昭和７(1932) 年10月の東京市域拡大前後の区町村対照表などが添付されている。

17) 前掲15）76頁。同所には仙北町在住（当時の）明治22 (1889) 年生まれの古老が以下のように述べていることから，古くから粉なんばん（一味唐辛子）の行商が盛んであったことがわかる。「青物町からは，よく“粉ナンバン”（とうがらしの粉）売りが箱をかついで出てきたもンです。まず粉ナンバンというのは，青物町の特産物でした。青物町の粉ナンバン売り、馬町のナット（納豆）売り，これには子どもらはよく出たもンです」

18) 前掲７）。

19) 岩手県農業会『岩手県の特産南部甘藍に就て』，岩手県農業会，1946，７頁。

20) 前掲19）８頁。

21) ①農山漁村文化協会『農業技術大系　野菜編11　特産野菜・地方野菜』，農山漁村文化協会，1988，16頁。②永山忠明「みちのくの伝統野菜」（野原　宏編『日本のふるさと野菜』，日本種苗協会，2009），19～20頁。

22) 前掲15）79頁。

23) 高橋家所蔵「大福帳」（昭和２年，昭和４年，昭和6年）。

24) 前掲15）78頁。

25) 清水克志「近代日本における外来野菜の導入と展開―キャベツとハクサイの早期生産地を事例として―」，筑波大学大学院博士課程人文社会科学研究科中間評価論文（修士論文，未定稿），2002，1～118頁。

26) 清水克志「野菜と食生活の近代―北方社会におけるキャベツの受容を例として―」（坂井俊樹・浪川健治編『ゆれる境界・国家・地域にどうむきあうか　歴史教育と歴史学の協働をめざして―教科書に書かれなかった戦争』，梨の木舎，2009），383～404頁。

27) 前掲７）。

28) 盛岡市神子田町の照井仁一郎氏からの聞き

取りによる。照井氏の祖父仁太郎は，大正期以降キャベツの仲買に携わった商人の一人であるが，キャベツの自家採種や育苗を行い，岩手郡北部や二戸郡の農家に対して，キャベツの苗を提供した。

29）前掲７）。

30）タキイ種苗株式会社出版部編『都道府県別地方野菜大全』，農山漁村文化協会，2002。

31）渡邉穎二『天職に生きる　渡邉穎二回顧録』，株式会社渡辺採種場，1997，70～88頁，および前掲21）①215～216頁，341頁。

32）金子才十郎『種子のロマン―日本種苗業界の歴史―　明治・大正篇』，カネコ種苗株式会社，1991，344～347頁。同書によれば，江戸滝野川の三軒家（桝屋孫八，越部半右衛門，榎本重左衛門）の創業は，1770～90年代であった。また，前掲１）③49～52頁によれば，金沢の小松屋（現，松下種苗店）の創業は文久元（1861）年であった。

33）前掲15）８頁，および盛岡市仙北町の前澤マサ氏からの聞き取りによる。

34）前掲32）237～238頁。

35）前掲15）79頁。

36）滝井治三郎『種苗七十年』，タキイ種苗株式会社出版部，1964，49～63頁。同書によれば，京都の滝井治三郎は明治40年代以降，石川県鶴来町の成瀬太一郎や京都の田中滝之助らとともに北海道へ渡っている。また，金沢市泉の松下種苗店の松下　良氏からの聞き取りによれば，大正期に先代の松下仁右衛門は，盛岡市仙北町の山田清之助とともに初めて北海道へ渡ったといわれている。

37）前掲32）304～323頁。

38）前掲36）109～135頁。

Development of Vegetable Seed Circulation and its Particularity in Modern Japan, by Analysis Based on the Dealings Record of a Seed Dealer on the Outskirts of Morioka

SHIMIZU Katsushi

This paper aims to clarify the role played by a local seed dealer and the surrounding area in the circulation, breeding, and growing of vegetable seeds in modern Japan, through analysis of the "Account book (Daifuku-Cho)" of the Takahashi shop in Senboku-cho, Morioka City, Iwate Prefecture.

The Takahashi shop provided stock seeds of local or foreign vegetables (especially cabbage) and consigned the seed growing to farmers in the vicinity. The shop also shipped a variety of vegetable seeds to them, and they sold the seeds in the Shimokita peninsula, Kitakami highlands, and Sanriku coasts, etc. Basically, the shop and the farmers worked together organically, and formed a vegetable seed growing industry region in which the shop became the nucleus.

Alternatively, the shop functioned as a junction of the seed circulation that connected the seed dealers in each city in Hokkaido and Honshu. The shop shipped the cabbage seeds and seedlings to the seed dealers and the farmers in the old Morioka Clan territory, and played an important role in the formation of a cabbage production area, based on the breeding technology and the advantage of seed circulation on a national scale.

Key words: Seed circulation, Seed dealer, Breeding technology, Account book (Daifuku-Cho), Morioka City